

天 日 槍 — その身分と神宝について —

任 東権※

目 次

一. 序 言

二. 天日槍の記録

三. 天日槍と神宝

1. 日光感妊

2. 神宝

①玉珠 ②刀剣 ③槍矛

④鏡 ⑤熊神籬 ⑥比禮

3. 美童女

四. 延鳥郎と細鳥女

五. 天日槍の身分

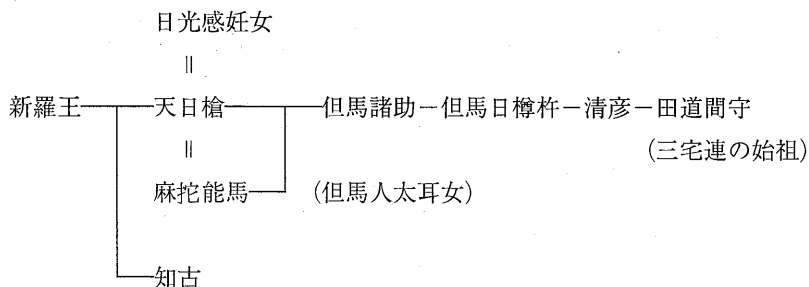
六. 結語

一. 序言

日本の史書には天日槍にかんする記録があり、神社や伝承に天日槍とのつながりが、よくある。

日本書紀や古事記によると、天日槍は新羅の王子とされている。日光感妊によって生れた美女を娶ったが、日本に渡ったので、そのあとを追って日本に渡り、但馬女を妻にむかえて、その子孫たちは、日本の古代史上で、多くの活躍をした。その系譜は次のようである。

日 本 書 紀



※韓国民俗学会名誉会長

古 事 記

新羅国王－天之日槍－多遲摩母呂須玖－多遲摩斐泥－多遲摩比那良岐

||

前津見（多遲摩之侯尾女）

└─多遲摩毛理
└─多遲摩比多詞－葛城之高額比賣命－息長帶比賣命
└─清日子 || (神功皇后)
息長宿禰王

上の紀記の表記には、それぞれの文字の差はあるが、訓読からすると同じ音になり、ただ表記上の差があるにすぎないことが分かる。すなわち但馬が多遲摩、諸助が母呂須玖、日槍杵が比那良岐、田道間守が多遲摩毛理になっている。

毛理の弟である比多詞の孫娘に、息長帶比賣命すなわち神功皇后がいて、天日槍の後孫は天皇系との血統があった。また田道間守は三宅連の始祖とされている。新撰姓氏（巻、24）によると、三宅連は新羅国王子、天日杵の後孫であると記録されてある。また、橘守も新撰姓氏によると、三宅連と祖を同じくして、新羅国王子天日杵の孫であるとされており、緑井造も三宅連と同じく、新羅国王子天日杵の後孫となつてあるので、天日槍の子孫たちが栄えていたことを察することが出来る。

ここに文字からして槍と杵は違うが、同じく武器であったことから推して、同義と解されるので、表記上槍の字に統一することにする。

天日槍は日本に渡る時に、玉、珠、刀、劍、杵、鏡、神籬、比禮等の、神宝を持って来たが、これらは呪力があつたことからして、巫具であつたであろうと、理解される。

天日槍にかんする研究は多く進められていて、今井啓一の「天日槍」をはじめ、金沢庄三郎、三品彰英の業績があり、韓国とのつながりが論じられている。しかし、韓国の学界ではあまり、関心がうすかつたので、天日槍の研究は、まだ零細といえる。その理由は、日本の史書には天日槍について、多くの記録がのこされてあるが、韓国の史書には何も残されていない。ただ三国遺事にある延鳥郎と細鳥女夫妻が、日本に渡つて行つた記録があつて、両者の関連と、ひいては同一人物である可能性が、論じられている。

天日槍と延鳥郎の行跡には、類似点があつて、非凡でありなお海を渡る航海術を身につけていたし、両者とも妻を追つて、海を渡っている。したがつて、諸文献を分析して、民俗学の視点から、その身分と神宝について、明らかにして見ることにする。

天日槍は文献によっては、天日杵、天文日杵、天之日矛などとあるが、この小論では天日槍に統一して述べることにする。

二. 天日槍に関する記録

天日槍を研究するためには、日本書紀、古事記、風土記、新撰姓氏、三国遺事など諸文献を、資料とする必要がある。

①日本書紀

日本書紀によると、垂仁紀と応神紀には、天日槍について、くわしく記録されてある。

垂仁三年（BC 27）三月條に、次の様なことがかかれてある。

⁽¹⁾新羅の王子天日槍が渡来した。持参した物には羽太玉一箇、足高玉一箇、鴉鹿鹿赤石玉一箇、日鏡一面、熊神籬一具、小刀一口、出石杵一枝等七物であった。但馬の国ではこれらを藏して、七神宝とした。

一説によると、前に天日槍が船にのって来て、播磨国に泊り宍粟邑にいた。その時に天皇は、三輪君の祖にあたる大友主と、倭直の祖である長尾市を播磨につかわして、天日槍に「汝はどの国の誰であるか」と訪ねた。天日槍は「私は新羅の国の王子である。日本国に聖皇がいるときいて、国は弟の知古にゆづって帰した」と答えた。この時に持参した神宝として、葉細珠、是高珠、鴉鹿鹿の赤石珠、出石刀子、出石槍、日鏡、熊神籬、膽狹湊大刀の八物があつた。それで、天日槍に詔して「播磨国の宍粟邑と淡路島の出浅邑のうち、すきな所に住むよう」にした。

天日槍は「すきな土地がもらえるなら、諸国を旅してすきになった所を、賜って下さい。」とねがった。天日槍は菟道河をさかのぼり、近江国吾名邑にしばらくすんだ。近江から若狭国を通じて、但馬に至って定住地と定めた。近江国鏡村の谷の陶人たちは、天日槍の従者たちであると言われている。

但馬に定着した天日槍は、出嶋の人太耳の麻挖能鳥を娶って、但馬諸助を生み、日樽杵清彦、田道間守とつながって、但馬族となった。

以上が日本書紀にかかれた、天日槍にかんするあらましで、天日槍は新羅国の王子で、七物とも八物ともいわれる神物をもって来て、宍粟邑や出浅邑の提議をしりぞけ、近江若狭をへて、但馬に至り、但馬の女を妻にむかえて定住し但馬族になっている。

天日槍が新羅からもって行つた神物は、本文では七物であるが、一説としては八物となっていて、玉珠、槍杵、刀剣、神籬の共通性がある。

②日本書紀

同じく日本書紀の、垂仁八十八年（AD.59）秋七月己酉朔戊午には、次のように記録されてある。

⁽²⁾天皇が群郷に対して「新羅国王子天日槍がもつて来た宝物は、今但馬にあって、神宝とされている。その神宝をみたい」それで使者を送り、天日槍の曾孫である清彦が献上するようにした。羽太王、足高王、鴉鹿鹿赤石玉、日鏡、熊神籬は献上したが、小刀だけは清彦が泡のなかにかくして、出さなかった。天皇はそれとも知らず、清彦をもてなすために、御所で饗宴をもよお

した。宴中に小刀が清彦の袂から落ちたので、しかたなく小刀も献上した。

神宝はみな神府に収蔵されたが、のちに神府をあけてみると、小刀だけが無かった。清彦に使者をおくり、小刀だけが紛失されたが、そのわけを聞いてみると、実は昨夜小刀が自から戻ったことを語った。天皇は小刀の呪力を知り再び小刀を求めなつたと、いわれている。小刀は神秘的な刀であったからである。

その後、小刀は自から淡路島に行ったので住民たちは神宝として、祠を建て祭るようになった。

昔ある人が、舟にのって来て但馬に定泊した。それで「そなたは、どこの国の人か」とたずねたところ、新羅の王子天日槍であると答えた。そのまま但馬に住み、原住民の前津耳（一云太耳）の娘、麻柁能鳥を妻にむかえ但馬諸助を生んだ。これが清彦の祖父にあたる。

以上の記録は、垂仁三年條の記録より進んで、小刀の神出奇没する神秘性が添加されてある。神宝は垂仁三年の本文には、七種になっているが、出石杵が脱落して、六種になっている。

③古事記

古事記には、天日槍の新羅におけることまで、記録されてあって、貴重な内容であるが、次のようである。

⁽³⁾昔新羅の王子に天日矛がいて、日本に渡来した。その理由については、説話がある。

新羅にある沼があって、阿具奴摩と呼んだ。沼の近所で、一人の賤女が晝寝をした。太陽の光線が虹のようになり、ひるねする女の陰部をさすのを、或る賤夫がみて不思議におもい、何時も女の行動をかんしした。この様なことがあった以後、女は孕んで赤玉を生んだ。賤夫はせがんで赤玉を貰い、よく包んで腰にぶら下げた。

賤夫は山谷の畑を耕して、暮らしていた。ある日農夫たちの食物を、牛にのせて谷間にはこんだ。この時王子天日矛が通りかかり、牛をつれて山谷に行くのは、牛を殺すつもりであると誤解して、獄に入れ罰しようとした。この時に賤夫は赤玉を贈って許しを乞うた。

天日矛は赤玉もちかえり、部屋の床においたら、その赤玉から、美しい女の子が生まれ出た。のちに天日矛はその美嬢を娶って妻にした。美女は毎度かずかずの珍味を出して夫に仕えたが、夫は心が高慢になり、妻を罵った。妻はそれでは祖の国にかえると言って、ひそかに小船ののって、海を渡って難波についた。

天之日矛は妻が日本に渡ったことを知って珠二貫、振浪比禮、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、奥津鏡、邊津鏡の八物をもって来た。これが伊志之八前大神である。

以上の古事記では、日本に渡来する前に、新羅でおこった事件が、くわしく書かれてある。即ち日本書紀では、天之日矛の日本における行跡だけが、記録されてあるが、古事記では、賤女が赤玉を生んだ過程をはじめ、赤玉をもらった賤夫が、死をまぬがれるために、赤玉を王子に譲り、王子は赤玉から変容した美女と婚し、冒言された妻が日本に渡ったので、あとを追って渡来した過程が、くわしく語られている。ここで注目されるのは、賤女が日光と交感して、赤玉を生んだ太陽感妊説話、また、赤玉から美女が生れる卵生説話、山海の珍味を料理して盛饌をつくる神秘

的な超能力の行為や、浪も風も起こしたり、静めたりする呪具の信仰性など、多くの意味がふくまれてあり、八物の神宝やこれらを操ることの出来る人の能力と身分に対する、暗示があるので、貴重な資料と言える。

④播磨風土記

播磨風土記の揖保里條には、次のような記録がある。

(4) 揖保（イイボ）を粒丘（イイボオカ）とも呼ぶ。天日矛が新羅から渡って来て、宇頭川下流に上陸して、葦原志拳乎命に宿所を求めて、「あなたは、この国の首長であるから、私の宿をあたえてくれ」とたのんだ。それで志拳の海上に留るようにした。この時に客神である天日槍命は、剣で海をかきまわした。主神は客神の荒々しい行為をおそれ、もしかしたら国土を占めるのではないかと思って、粒丘にのぼって急いでめしをたべた時に、めしつぶを落としたので、粒丘とよぶようになった。この山の石は食粒の形をしていると言われている。

また客神の天日槍は、杖で大地を刺してから、引抜いたら、そこから冷い水が湧き出て南北に分かれて流れた。北に流れた水は冷水であり、南に流れる水は温水であった。

上の記録からすると、天日槍は新羅から海を渡って、瀬戸内海にはいり、播磨にしばらくとどまったが、その時に剣で海をかきまわしたり、杖で大地を刺して、冷泉を湧かす湧泉型伝説をのこした。劔で海水を掻きまわすことに、恐れを感じたのをみると、それは呪術行為か、大力の持主のする行為であったようである。また湧泉行為は、巫俗と道術の習合した話で、よく高僧大師の行統として、説話の一類型である。

播磨の揖土は瀬戸内海にあって、韓国から大和に行く、航海路に位置して、はやくから航路がひらけていたことが、わかる。

三. 天日槍と神宝

1. 日光感妊

日本の古典文献に記録されてある内容のうち、天日槍が日本に渡る前半のことは、新羅で起こった事件であるので、韓国民俗現象としての観点から、アプローチする必要がある。

古事記⁽⁵⁾によると、新羅に阿具奴摩と呼ばれる沼があって、その近所に賤女がすんでいたし、その女が太陽の光で陰部をさされて妊娠したし、赤玉を生みその赤玉が美少女に変容され、王子である天日槍の妻となった。のちに夫の詛言にあきて、のがれて日本に渡ったとのことである。

先ず問題とされるのは、人間同志の婚姻ではなく、太陽の光にさされて妊娠した。日光感妊説話である。韓国にはこの様な型の説話がいくつか伝っている。

高句麗の始祖は朱蒙であるが、誕生説話は次のようである。

河伯⁽⁶⁾の娘である柳花は、金蛙王によって、家の中に立て込められていたが、太陽の光が身にあたるので、屋内に身を引いたが、それでも光がのびて、身を照らして孕み、卵を生んだ。卵の大きさは五升位であり、王は卵を捨て犬や豚にやっただが喰わず、道端にすてても牛も馬も踏ま

ないで、避けて通り、野外に捨てたが、鳥や獣物が蔽うて保獲した。王は卵を割ろうとしたが、割れないので、仕方なく母にかえした。母は卵を包んで温い所においたら、卵の中から男の子がうまれた。

卵生児は気骨が丈夫であり、七歳になるとみずから弓矢をつくって、射つと百発百中であった。諺に弓をよく射つ人を朱蒙と呼ぶので、名前を朱蒙とつけた。朱蒙は成長して、高句麗の始祖東明王になった。

柳花が日光をうけ感妊して、卵を生み、卵の中から朱蒙が生れる卵生説話である。朱蒙の誕生譚と天日槍の妻の誕生譚は、多くの類似点がある。朱蒙の母である柳花は、太陽の光をさけたが、それでも追って来て照らされ、孕んで卵を生んだし、天日槍譚の場合には、女人の陰部を陽光に刺されて孕み、赤玉を生み、その赤玉から美女が生まれている。卵と赤玉の差はあるが、赤玉は卵の象徴であろうし、生まれた人も卵から男子、赤玉から美女になっているが、特殊人の出生過程における卵生を意味する共通性がある。したがって同じモチーフによる説話と、解釈される。

日光感妊譚は外にもある。江原道江陵地方につたわる、江陵端午祭は、無形文化財として国から指定されてあるが、その起源説話の一つとして、大関嶺城隍神である泛日（一名勞日）国師の誕生譚は、次のようである。

⁽⁷⁾ 溟州郡邱井面鶴山里に、屈山寺跡がある。昔近所の村娘がいて、屈山寺の石泉にいったバカチ（フクベ）で水を汲んだ。水を汲んだハカチの中に太陽が浮かんであるので、水をすてて新しく汲んだが、まだ太陽が浮かんであった。娘は三度目に水を汲んだが、それでも太陽が浮かんであったので、仕方なくその水をのんだ。

その後娘は孕んで、月満ちて男の児を生んだ。家族たちは父無し児を生んだので、大騒ぎになり、ついに裏山の鶴岩とよばれる、大岩の下に児をすてた。

児をすてた母は、翌日の朝早く、裏山の鶴岩にいて、のぞいてみると、意外にも山鳥たちが羽根で蔽うてやり、幼児はすやすやと寝ている。また獣物たちは、幼児を害しないで乳をのませるのであった。このような光景をみて、母はもちろん家族も村人たちも、この児は非凡な人になるとさとり、児を家につれてかえった。男の児はよく育ち、のちに国師（大僧）になって、国に手柄をたて、大関嶺の城隍神になったそうである。

毎年5月5日の端午の日になると、大関嶺の城隍神を江陵市にむかえて、女城隍と合祀する郷土神祭が行われるが、江陵端午祭である。

城隍神である泛日国師の母は、バカチの中の太陽水をのんで、日光感妊により、泛日を生んだ伝説である。日光感妊によって生まれた児を、動物たちが保育した説話は、朱蒙譚と泛日譚が同型であり、民間伝説にもあるので一つの類型と言える。

日光感妊譚は古代における、韓国説話の一類型であったが、天日槍の妻の誕生譚として日本に伝播したのは、人の移動による伝播の例にあたる。

卵生説話は新羅の始祖、赫居世の誕生譚にもある。

⁽⁸⁾ 天から異常な電光が地に垂れたので、訪ねてみると白馬がひざまつており、よくしらべ

てみたら、紫卵（一説青卵）があった。白馬はいないで天にのぼってしまった。その紫卵を割ると中から男児が生まれた。形儀が端美であるのに驚き、東泉の水で体を洗った所、身から光彩をはなち、鳥や獣たちが舞い天地が振動して、日月が清らかであったので名を赫居世とつけた。のちに国を建て王となった。新羅の始祖赫居世王である。

まだ新羅の第四代王の誕生譚にも、卵生の話がある。

娉積女⁽⁹⁾ 國では久しく、王子がなかったので神に禱って子が授かるよう祈った。七年後に一大卵を生み、その大卵から男の子が生まれたが、脱解王である。

このように日光感妊譚と卵生譚が、習合して、古代において王や偉人の誕生譚とする、類型説話を形成したのである。天日槍の妻の赤玉から生まれる誕生譚も、その類型に該当すると言える。

2. 神宝

天日槍が新羅から日本に渡る時に、神宝を持って行った。日本書紀によると、垂仁三年三月に羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿鹿赤石玉一箇、出石小刀石一口、出石杵一枝、日鏡一面、熊神籬一具、合わせて七物を、但馬国に収蔵して、神物にしたと記されてある。

また一云として、葉細珠、足高珠、鵜鹿鹿赤石珠、出石刀子、出石槍、日鏡、熊神籬、膽狭浅太刀、合わせて八物となっている。

また同じく日本書紀、垂仁八十八年七月條には、羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿鹿赤石玉一箇、日鏡一面、熊神籬一具、小刀（出石）一口となって、六物が記録されて、七物、八物、六物として、数の差が生じている。

古事記⁽¹⁰⁾によると、天日槍は新羅から、玉津宝として珠二貫、振浪比禮、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、奥津鏡、邊津鏡の八種を持って来たと、記録されてある。

数意識からすると、七は陽数で吉数であり八数は陰数であるが、古代から好まれる数で新羅の八品聖骨をはじめ、八達、八方、八関会、八珍、八萬、八百などの例からして、吉数と認識されていた。七数は七宝、三七日、留七日などが、民俗数として愛用された。したがって、神宝の数において、吉数の神宝を持参したと言える。

以上の天日槍が持参した、神宝にかんする記録文献を一覧すると、次のようである。

| 文 献 | | 神 宝 名 | 数 |
|------------------|--------|---|----|
| 日 本 書 紀 | 垂仁 三年 | 羽太玉 足高玉 鵜鹿鹿赤石玉 出石小刀 出石杵 日鏡 熊神籬 | 七物 |
| | 同上 一年 | 葉細珠 足高珠 鵜鹿鹿赤石珠 出石小刀 出石槍 日鏡 熊神籬 膽狭浅太刀 | 八種 |
| | 垂仁八十八年 | 羽太玉 足高玉 鵜鹿鹿赤石玉 出石小刀 日鏡 熊神籬 | 六物 |
| 古 事 記 | | 珠二貫 振浪比禮 振風比禮 切風比禮 奥津鏡 邊津鏡 | 八種 |

神宝を分類すると、①玉（赤石玉）または珠 ②刀（小刀，太刀） ③槍（杵） ④鏡 ⑤神

籬 ⑥比禮に大別される。

1) 玉珠

玉は羽太玉、足高玉、赤石玉があり、珠には葉細珠と珠二貫がある。二貫とは重量の意味でなく連珠二つのことで、多くの小珠を紐に通して連ねたもので、僧呂の首掛や百八念珠のようなものと解される。

玉や珠は古代から宝の一種として、貴重な宝物とされたし、高価な神宝でもあった。新羅の女が日光感妊して赤玉を生み、赤宝から女兒が生まれたとされたのは、玉には生命力があって、鳥類の卵のように、生殖の機能が認められた。

新羅をはじめ、三国時代の古墳の遺物には玉や曲玉がよく出土されて、腰帯や王冠などに嵌められてあって、高貴な宝物であったし、今も巫女たちが、神賽を行うときに、好んで佩用している。

玉珠が古墳から出土するのは、古代の王や高官たちが用いたことを意味し、また玉珠が生命力のある、特殊なものであると言う認識があったからである。玉や珠は形が円丸にして、小宇宙を象徴して、卵のように生命力が潜在するものと、認めたからである。新羅の眞平王が王位⁽¹¹⁾にのぼる年に、天の上皇の使者が、玉帯をもって来たのは、玉帯が王位の象徴であったし、権威の象徴でもあったからである。このように、王権と呪力をもつ玉や珠は神宝と、認識されているので、天日槍は日本にもって行ったし、日本でも神宝として崇められ、呪力をもつ神器として、受容されたものと思う。

玉のうちでも、特に赤玉または赤石玉とされたのは、赤色の呪力を認める色彩意識があったからである。阿彌陀經には赤珠は七宝中の一つにされてあるのは、仏教でもはやくから、そのような意識があったものと思われる。

赤色は太陽、血液、火などを象徴し、これらは生成力が旺盛で、災厄や悪魔をはらう辟邪の力があって、嬉色として認識されて、韓国の民俗⁽¹²⁾では逐退鬼の色彩として、よく採用されている。

2) 刀剣

刀としては出石小刀、出石刀子、膽狭浅太刀などの記録がある。刀は物を切ったり削ったりして、生活道具として有用に活用されるし、また狩猟や敵とたたかう時には、攻撃用の武器であった。武器は生命を守ってくれるので、大事にしたが、無敵の神刀の話も伝承されて、武士なら誰もほしがった。古代においては、冶金の技術と鉄刀をもつと有利であったので、刀剣は王権の象徴でもあった。

播磨風土記⁽¹³⁾によると、天日槍が剣をもって海水を攪きまわしたので、その荒々しい行動に対し、主神がおどろいたのも武器として剣の威力があったからである。垂仁天皇⁽¹⁴⁾が天日槍の曾孫である清彦に命じて、神宝を提出させる過程において、清彦は出石小刀だけは隠したが、のちに発覚して、やむをえず小刀まで捧げた。ところが小刀は自から、清彦のもとにもどり、のち

に淡路島に出現したので、祠をたて神として祀られるようになった。小刀は神力であったので、清彦は隠して惜しんだし、小刀は自から神出奇没する呪力をもった、呪具の一種であった。石上神社に所蔵されてある七枝の神刀も、神儀の呪具とされており、巫儀の場合によく神刀や剣が使用されるのも、刀が単なる道具でなく、神具として意識されていたことを、立証するものである。

韓国には神刀、剣にかんする、説話が多いし、寅刀と言って寅の年、月、日、時につくった刀は、神秘力をもつと言われている。寅力思想があって、その呪力がみとめられている。ムーダンの巫俗儀では、刀剣槍は呪具として活用されている。巫女が刀剣を両手にもち、ふりまわしたら歌い踊ったり、また小刀を投げて、占うことはよくある巫儀の一種である。このような場合の刀剣は、武器と言うよりも、呪具としての機能をもっている。古典舞踊のうち巫女舞では、両手に小刀をもって踊るのは、巫儀の舞踊化である。

3) 槍俵

文献には槍俵矛と記録されてあるが、みな尖端が鋭利で、相手をさして死傷する攻撃用の武器であるので、形においては、多少の差はあるが、武器としての共通点がある。武器は身を守ってくれるので、大事にしたし、古代の神儀にはよく装飾用、または呪具として使用された。槍俵が攻撃用になるので、悪鬼、妖怪、尖厄、悪疫などもしりぞける類感呪術によって、神儀に採用されたものである。

日本の神社には、よく槍俵矛を、宝物殿に所蔵してあるのは、武器としてよりも、神儀用として知られている。韓国における巫俗祭儀にも槍や刀が、よくつかわれる。木の把手に鉄剣をさした槍が、巫儀によく登場する。振りまわすと災厄や悪鬼が逃げるので、はらう辟邪の儀の動作である。また、三枝の槍に豚を丸ごと刺して立て、妙技をみせる神饌の場を演ずるが、神力を誇示したり、また、神を満足させるための、娛神の儀として、槍をふりまわして踊ったり、槍で攻撃する動作を演じるのも、呪術的な機能と解釈される。

4) 鏡

天日槍が持参した神宝のなかに、鏡があった。日本書紀ではみな日鏡となっており、古事記では奥津鏡、邊津鏡の、二種類になってある。日鏡とあるのは太陽を象徴したものであり、奥津鏡邊津鏡となつてあるのは、渡来性を暗示するとも考えられる。海をわたって来た過程を示す。宗像神のように、沖津、邊津、奥津神とあるように、沖から海岸に上陸して、内陸の奥の方に進んだ経路をしめしたのではなからうか。

海を渡って来た日鏡は、神器として大事にされ、信仰的な意味をもっていた。鏡は太陽の光のうけかえて反映する小太陽であり、実体を鏡の中に再現してみせる神秘的なもの、神宝として崇められ、呪化したものと思われる。よく神殿の正面に、円鏡をそなえるのは、宇宙と太陽を象徴する神器とした、心意があったからであろう。対馬の佐護の、天神多久頭魂神社には、天女射宮があって、照日姫神像が奉安されてあるが、胸に日輪があるのは、太陽すなわち日鏡を意味する

ものと解される。現地では、照日姫は天道神の母神とされている。

韓国の西北黄海道系の巫女は、クッを行うときには、胸に円鏡をつけて踊り、巫儀祭壇には、幾つもの円鏡を飾ってある。円鏡が小太陽として、世の中のあらゆる事象に精通して司どり統率する能力があるものと、認めているからである。また巫女の旗や服装にも、鏡を象徴した小銅鏡を、鈴なりにつけることもあって、巫呪的意味があった。

司祭者が日鏡を身につける習わしは東北アジアに広く伝承されている。シベリアのシャーマンは、日鏡を幾つも身にかざったり、胸にも飾る。蒙古のシャーマンもやはり日鏡を飾るし、内蒙古の呼和浩特のラマ寺院では、神像の胸にも飾ってあったし、また、日本の神社でのように、寺殿の正面の神像の前にも、安置されてあった。また寺殿の外壁にも、日鏡形の円鉄板がはめてあった。

韓国では巫堂のほかにも、日鏡を象徴する装飾が、リーダーや指揮者にもみられる。ソウルの近郊松坡の踏橋戯のとき、先頭に立つ人の帽子には、日鏡でかざられてある。先頭にたつ人はリーダーであり、彼は先頭で道をあけ乍ら進む権威ある存在である。全羅南道の農楽隊でも、先頭に立つ、第一打楽手であるサンセ（上鏡）の、背中や両肩には、日鏡で飾られてあるのも、リーダーとしての権威を、あらわしている。したがって、日鏡は司祭者、王者、リーダー、指揮者としての、権威の象徴であった。

5) 熊神籬

熊神籬については、古事記には記録されていないが、日本書紀には、「熊神籬一具」とされてある。日本の神儀によると、「神籬とは古代において、栄樹をめぐらし、その内部に神籬の御室として、祭儀する場所」のことである。したがって一定の空間を必要とする。今も古社の裏山などに、よくその面影をのこす祭壇として、四方に榊や竹をたて、シメ縄を張りまぐらした聖所をみかける。

日本神道における、神の仮御室としての神籬と、日本書紀に記されてある熊神籬は、機能的にはその継承であるが、形体からすると変化があったものと解される。その理由としては、先ず上古の神籬は、一定の土地空間を意味するので、とても持ち歩いたり、運搬することは出来なかった。したがって日本書紀の原典にある様に「熊神籬一具」すなわち、「熊」と「一具」のことである。神籬は熊との関連があったし、一具としたのは、神籬は土地の空間ではなく器具であり、したがって、天日槍が舟にのせて、日本にもちはこべる物でなければならない。「熊」や「一具」を切りはなして、神籬だけを意識する解釈は、妥当とは言えない。新羅からもって行ったからには、現場からの解釈を必要とする。

中国の漢書、後漢書、魏志、三国志などの、東夷伝によると、BC 前後頃の状況が記録されてある。夫余では正月と臘月に祭天し、馬韓では五月と十月に鬼神を祀り、濊では十月に祭天した。百濟では神や山谷の神をまつたし、新羅ではよく山の神、川の神をまつたことが記録されてある。三国遺事によると新羅では五岳三山神をまつた。古代においては、自然神を祭る信仰が

あった。

また新羅の第二代南解次雄王は、三年に始祖廟をたてまつったが、以後歴史代王は、即即位翌年の正月か二月、すなわち新春には、必ず親祀を行った。第二十一代炤知王九年⁽¹⁵⁾ (487)には、始祖初生の地である奈乙に、神宮を置いて親祀をした。神宮は祖霊をまつる祠である。以後第五十五代景哀王元年 (924) に至るまで、神宮親祀は宮廷儀の慣例として行われた。このように新羅の王家で、祖先神を大事にして、登極した翌年の新春には、必ず祖霊に報告してまつたものである。

韓国の家庭では、長男の家には祠堂（サタン）と言って、祖霊をまつるほこらがあった。日本の神棚や仏壇のように、けがれのない部屋にそなえて、四代祖までの祖霊をまつた。四代までは家で祀り、五代祖からはお墓場でまつるのが、近來までの慣習である。祠堂の中には祖の位牌があって、ふだんは扉をしめておくが、まつりの時には開ける。引越の場合には祠堂は大事に持って行く。すなわち祠堂に祖霊がまつられているし、引越す時にも必ず持って行って、放棄すること等はない。このほこらを龕室ともよばれる。

神籬が神の仮宿で、一定の空間に設けられているに対して、祠堂龕室は祖霊の仮宿であるが、空間に固定しないで、引越しや必要によって、運搬移動が出来る。したがって、天日槍が持って行った熊神籬一具は、龕室のような神の仮屋の一具と想像される。海を渡って新天地に行く時に、祖霊を龕室に仮宿させて運搬し、日本についてはもう移動しなくなって、一定の土地に神の仮屋をもうけるよう神籬として適応定着したであろう。

熊神籬の「熊」の家はなにを意味するものであるか問題である。熊の字をのぞいて、唯神籬と解釈する意見には、物足りない感じがする。日本書紀の作者がまちがって、熊の字をつけた筈はないので、熊の字にはそれなりの意味があったものと思う。

韓国の建国神話は熊女を母とする、壇君の話からはじまる。熊が神示にしたがって、艾とニンニクを喰べて、三、七日間太陽をさけ謹慎したあげく、女に変異して、天から降りてきた桓雄と婚して、壇君を生んでいる。この神話は熊トーテミズムであり、熊は神格をもつ動物であった。熊を神格視する宗教は、シベリアや樺太北海道のアイヌ文化にまで、広範に分布して、北方系信仰ともいえる。熊の韓国音コム（吾）、コム（后、神、干）は同義であり、アイヌのカムイ（熊）日本のカミ（カミ）と、連繋されるものである。

熊神籬とは信仰する神をおさめた箱、または神の仮屋である祠を意味するものと、解釈される。新居に移動する時に、何時故国にもどることも計り知れないので、祖先代代まつた神の仮屋を大事にもって来たであろう。神の仮屋である祠は、龕室のように木製の具であったから「熊神籬一具」と記録したであろう。新天地である日本に着いては、もう移動の必要もないので、一定の場所に奉安して、聖所化したものと思う。また時代がたつにしがたって、新神が次々に生え、自然の神や祖先の神を、神籬に祀るように伝承したであろう。

この様な発想は、多くの論議をよぶ可能性があるが、韓国の建国神話には、熊を神格視して熊トーテミズムの、信仰があったし新羅時代になって、天日槍が日本にわたる時に、先祖代代の神、

故郷の神を、仮屋である神籬に奉安して、新居地にもって行った可能性は、排除されない。したがって、熊神籬は伝播時の原型であり、古代の神籬は第二段階の発展型と言える。

6) 比禮

比禮にかんする記録は、天日槍のほかに、同じく古事記巻上⁽¹⁶⁾にも、蛇比禮蜂比礼のことがかかれてある。すなわち、蛇が噛みつこうとする時には、蛇比禮を三度振ると、蛇がにげるので、安らかにねむることが出来るし、ムカデや蜂が家のなかにはいる時に、比禮を振ると皆消え去った。

辞苑によると「比禮は古代において、昆虫などをおいはらうため、ふりまわす物」となっているが、古事記によると、昆虫や蛇、蜂、蜈蚣、蛇などが、人に害毒をあたえる時に、追いはらう器具であったし、天日槍の場合は、比禮には振浪比禮、振切比禮、振風比禮、切風比禮があって、波をおこしたり鎮めたり、またかぜをおこしたり鎮めたりする呪具の一種であった。小は虫から大は波や風まで、興したり静めたりする強大な力のある比禮をつくりあげた。

天日槍が妻のあとを追って、海を渡るためには、萬一のために、航海安全を保つ必要があったし、何と言っても海上安全には、風と波を静める須要があった。風浪は航海をおどかすので、風浪を鎮めることが、身の安全のために必要であった。それで風浪鎮圧の呪具として、比禮を持参したものと思われる。比禮は害虫や風浪も鎮めて、災厄をしりぞけることが出来るので、神宝として大事にされたし、異国にまで持って行った。

韓国では巫女がクッを行うとき、神竿、神將干とも言って、長さ一米位の竹柄に、白紙紐束を結んで、これをふり、降神接神と祓う呪具がある。こうすることによって、離鬼災厄不浄などを祓い、制圧するものと思われる。したがって巫儀には必須の呪具である。神將旗は五方神將旗ともよばれて、東西南北と中央を清めかためる役割をする。巫女は神將干を手にして、ふりながら清めたり祓ったりする。日本の神儀における、御幣やヌサの儀と、同じ機能をもつ脈絡として理解される。

比禮と同じ機能のある笛について、考察する必要がある、三国遺事には幾つかの記録をのこしている。

新羅第三十一代神文王⁽¹⁷⁾ (681～691) は、利見台に駕幸して山を眺めたら、不思議にも山が亀の頭のような格好であり、竹が生えていた。その竹は晝は二本であるが、夜になると一本になった。王は海を渡りその山に這入った。龍が黒玉帯を献じ、この竹で笛をつくり吹くと、天下和平になると言上した。のちにその竹で笛をつくり、月城の天尊庫に蔵した。この笛を吹くと、兵も退りぞけ痛みもなおり、旱魃に雨をふらせ、雨天も晴らせ、風も波も鎮めることが出来たので、萬波息笛とよび国宝とした。

夜は合一し晝は方化する。奇蹟の竹で笛をつくって吹くと、兵も平らげ痛みも治癒してなおり、気象の晴雨も自由にし、波も風も鎮めたのは、天日槍がもった比禮と、全く同じ機能の神物であった。神物であったから、国宝として天尊座に大事に蔵したのである。

また、神文王の子考昭王の2年⁽¹⁸⁾（693）に琴笛を失ったが、百栗寺の大悲像前で数日のあいだ祈禱すると、突然番卓の上に琴笛があらわれた。笛を二つにわって舟にして海を渡る奇蹟があったし、のちに琴と笛に爵をあたえて、萬萬波波息（笛）とよんだ所彗星が消えてしまったし、多くの靈異があった。このように笛には神出奇没したり、彗星を滅する呪力があった。それで宝として内庫に蔵して神笛として大事する信仰があった。神出奇没する例は、出石小刀の場合に似ている。

新羅第三十八代元聖王⁽¹⁹⁾は、祖先伝来の萬波波息笛を譲りうけ、天恩を荷して王の徳が、後世にまでつたわった。元聖王二年（786）十月に、日本文慶王が兵をおこして、新羅を伐うとしたが、萬波波息笛があると聞いて退兵した。日王は金五十両を使にもたせて、笛を請うたがことわり、二度目に金千両で神物を一度みて返すからと請うたが、元聖王はことわり、使臣に銀三千両をあたえて、帰した。使臣がかえたあと、笛は内黄殿に蔵した。

神笛は兵をしりぞけるほど偉力があったし、金で神笛を手に入れようとしたが、神宝であるので賣わずに、内黄殿に蔵したのである。註して日本に文慶王はなく、日本帝説によると、第五十五註が文徳王であったので、文慶王は文徳王の間違いであろうとの、意見をのべている。

以上を総合すると、新羅には神笛があつて①兵をしりぞける偉力 ②風も波も雨も止める呪力があり ③病気を癒し ④彗星を滅し ⑤晝は二つであるが、夜になると合一する奇蹟をおこし ⑥神出奇没する呪具になり ⑦神宝として内黄庫天尊庫に、大事に所蔵した。神笛はその機能において、比禮と似ていたし神秘視された。ただ笛は吹いて音を出し、その音が神霊につたわって、奇蹟が生じたが、比禮は音はなく、振る動作によって、奇蹟がおこった。

ここで一つ注目したいのは、比禮（FuRe）と韓国音での笛（PiRi）の音の近似性である。新羅では笛の音で鎮圧したが、天日槍は比禮で鎮圧したので、機能的には類似性があるが、形態的には差があつて、同型であると断定はむづかしい。佛俗では如有得道者、師授興之拂子と言って、高僧が虫数やハエを追いはらう時に拂子をつかつて来た。拂子は木の柄の先に、毛束を結んで、患や草虫を拂った。和漢三才図会では神祭佛器篇で、拂子を説明している。もともとはかんたんに、ハエや草虫をはらったり拂塵用であつたが、患をもはらったことは、病原をはらうことで、進んでは災厄までも、はらったものと思われる。ハエのようなうるさい虫類もはらうからには、もっと積極的に蛇や毒虫もはらい、なお風、雨、彗星もはらうように、発展した可能性もある。すなわち、はじめに現実的な器具が、その機能を広めて、呪術的に発展したことも考えられる。

3) 美童女

日感により赤玉から誕生した美女は天日槍と結婚したあと、夫をすてて日本に渡ったあとの行跡に対しては、あまり知られていない。妻に逃げられた天日槍は、妻を追って日本についたものの、妻には会えず、但馬の女前津見（麻柁能鳥）を娶って、子孫をふやしたが、新羅妻との再結合はなかった。

日本書紀、垂仁二年記には、古事記の天日矛の記録⁽²⁰⁾と、ほぼ似た内容がかかれてあるが、

次の様である。

意富⁽²¹⁾加羅国王子，都怒我阿羅斯等がいた。ある田舎で黄牛に田器をはこんでいたが，突然行方不明になった。阿羅斯等は，四方にさがしたあげく，田舎の民家に泊まることになった。村の老人から村にはいった牛を，郡の官吏たちが殺して，たべてしまったと語った。それで，その代償として村神として祀られてある白石をもらった。

牛主は白石を持ちかえり，大事に部屋においた所，神石である白石から，美麗童女が生まれかわった。王子我羅斯等は大いによろこんで，妻として娶おうとしたが，我羅斯等が留守のあいだに，突然すがたをかくしてしまった。美女が日本に渡ったことを知った。神石から生まれた美女は，難波に行つて比賣語曾社の神となり，豊国国前郡の復比賣語社神となった。それで二個處でまつられている。とかかれているが，今では方々の神社で，比賣語曾神がまつられてある。

古事記では赤玉から美女が誕生したが，日本書紀では白石から生まれたことになっている。赤と白の色の差はあるが，石から生まれる共通性があるて，石を神聖視したのと，卵生型の同じ類型説話と解される。

接津風土記⁽²²⁾によると，新羅の女神が夫からのがれて，筑紫国岐伊乃比賣島に住んだとされているが，比賣島は筑前の海中にある，姫島のことである。肥前国の其疑郡にも姫社郷があり，御原郡にも姫社があり，豊後国国東郡にも姫島があるし，豊前国鹿春神を，比賣語曾神とも言われて，比賣語曾神を祭神とする社は多い。したがって，天日槍の妻または我羅斯等の妻が，日本に渡つて女神になり比賣語曾とよばれて，方々の古社に祀られたのは，女神として信仰されたことが，認められる。

四．延島郎と細島女

韓国の文献では，天日槍にかんする記録がないし，そのような名前の王子がみあたらない。ただ東の方に海を渡つて行つた記録がみられる。

三国時代に百濟，新羅，高句麗から，多くの人達が，海を渡る冒険をして，日本に渡つて行つたが，国内では記録としてのこっていないが，日本の文献には，詳しく記録された例がある。その理由は，去ってしまったから，その後のことは分からないし，もう消えた人の事であるから，関心がなかったことと，もう一つは若い時に，去つたので，国内ではまだ揚名の機会がなかったが，新天地に行つては，新しい学問，技術をもって，社会的に貢献したので，開拓者，先駆者，指導者，知識者として，多く寄与したため，後世に歴史的人物として，伝わるようになった。彼等は重用されて，社会的な地位もたかく，優遇されたであらうし，その子孫も榮華にあずかり，その業績も記録にのこるようになった事と思う。その実例は百濟の王仁，鬼室集斯，禰嘉王などである。三世紀の末頃百濟では漢字がひろく普及していたので，王仁が千字文論語をもって，日本に行つたのは，大した事でなかったが，文字をもたなかった日本としては文字の伝来は，文化史上最大の事件として，とり扱う価値があった。鬼室集斯も百濟史には名がないが，日本では学職頭として，学術発展に大きな貢献をなした。また，九州の僻村である東臼杵郡の南郷村に，師

走祭りが伝承されているが、百済王禎嘉とその一族とのかかわりを背景にした、郷土神祀として、伝承されている。しかし百済史書では、禎嘉王の名は見られない。天日槍の場合も、新羅の文典には記録されていないが、日本の紀記や多くの文献に、記録があって、古代史や信仰史には、多くの足跡をのこしている。

天日槍を研究するにあたって、新羅の延鳥郎と細鳥女の話と、関連づけることが、可能である。

新羅⁽²³⁾第八代、阿羅王四年に、東海の浜辺に延鳥郎と細鳥女の夫婦がすんでいた。或る日延鳥が海に出て海藻をとっていたが、岩が延鳥を載せて、日本に行ってしまった。(一説では岩ではなく魚であるとも、言われている。)日本では延鳥郎を非凡な人物として迎えて王にした。(日本帝説には新羅人が、王になった例がないので、中央の王ではなく、邊方の小王であったと思う。)

細鳥女は夫がかえらないので、海浜に行ってみると延鳥の靴があったので岩の上に立った。すると岩を細鳥をのせて、日本についた。日本では人々が驚き、王に知らせて夫婦逢わせて貴妃とした。延鳥郎と細鳥女が、日本に渡ったあと、新羅では日と月が光を失って、暗になったので、日官に占ってもらいと、日月の精が日本に渡ったからであると言われた。王は使を出して、帰えるように願ったが、日本に来て天使になったので、今さら戻れないから、王妃が織った綿織があるからそれで天を祭るよう言われた。新羅王はその通りに綿織をそなえて、天を祀ったところ、日月は昔のように光が戻った。その綿織は御庫に所蔵して国宝とし、その倉庫の名を貴妃庫とよび、祭る所は迎日県都祀野である。

天日槍譚と延鳥郎細鳥女譚は、類似点がある。天日槍は妻を追って渡り、延鳥郎の場合は妻が夫を追って渡ったが、海を渡り日本に夫婦共に行った、共通点がある。天日槍はその名からして日神であり、延鳥郎も日神であった。天日槍がもって行った神物は、神宝にされたし、細鳥女が織った綿織は、祭天することによって、日月を復活させたので、国宝として、貴妃殿に所蔵した。神宝も国宝も呪力があって、奇蹟をおこしたのは、呪具としての機能が認められる、共通点があった。

三国遺事の著者である僧一然是、遺事を著述する前に、既に日本帝記をよんでいた事は、註記に延鳥郎は日本中央の王ではなく、地方邊方の小王であるとの、見解をのべたので分かる。天日槍は但馬に定着して、土豪に成ったのと延鳥郎が邊方の王になったのは、共通性がある。

韓国では天日槍の記録がないし、日本では延鳥郎細鳥女の記録がなく、一方だけの文典に有る。同じく日神であったし、新羅から夫婦が渡海して、日本に行った点、また呪力のある神物として、神宝や国宝をもっていた点が、多くの示唆がある。

日本列島も元来は大陸の一部であったが、約二万年前後に、地核の変動があって、陸地が陥没して海になり、日本は島になってしまったと言われている。島になって孤立され、往来は断れたが、のちに舟と航海術の発達によって、往来出来るようになった。歴史時代になって、大陸から人達によって、新文明がはこばれて伝播された。渡海者達は豪族となり、支配者、知識人として、社会発展に大きな貢献したのは、事実であるだけに、天日槍もこのような、渡来族の一人であった。新羅と日本は、お互いに海の対岸に位置して、いちばん短距離にあったので、海流を利

用して、日本に渡るには容易であった。

天日槍が渡来した時期に、日本書紀のように垂仁三年にすると、西紀前27年で新羅赫居世三十一年にあたる。延鳥郎細鳥女が日本に渡った新羅阿達羅四年は、西紀百五十七年であるから、約百八十年の差があるので、渡来年代を明らかにするのは難しい。

天日槍譚と延長郎譚は、多くの共通性があるので、同一人物であった可能性も考えられる。

五. 天日槍の身分

記録によると、天日槍は「新羅王子」または「国主之子」となっていて、新羅国王の子、すなわち、高い身分である。王子としての権力があったから、神宝を持つことも出来たし、農夫から赤玉をもらって、罪を許したし、性格の高慢性があって、妻に対して詈言をあげたので、妻が日本に渡って逃げる、事件があった。諸文献から推してみると、天日槍は王子としての高い身分であり、高慢な性格の特主とも言える。

天日槍の出生過程については、何の説明もないが、その妻である「美麗嬢子」については、卵生説話としての、神秘的な話があった。身分のいやしい娘が⁽²⁴⁾、湖のほとりでひるねをしていた時に、太陽が娘の陰上に照らして、妊娠する奇蹟があり、のちに、赤玉または白石を生み、その玉石から美嬢が生まれる変異の奇蹟があった。よく古代説話における、非凡な人物の出生過程の話と、同じ類型の話である。王子である天日槍の妻となる人物であるからには、母は賤女であっても、太陽と異構する神婚によって、太陽の娘として神秘性をもたせて、天日槍と同じ格をもたせたものであった。赤玉と白石は石である点は、同じだが、色彩では差がある。しかし赤は太陽色であり、白は太陽の照る晝の色である点からすると相通じるものがある、同じ意味とも解釈される。

神秘的な出生譚をもつ美嬢子は、夫から逃れて日本に渡ったあとは、消息がたえてしまい、比賣許曾神となって消えてしまう。しかし、王子であった天日槍は、新羅では平凡であったが、日本に渡ってからは、非凡な業績をのこし呪術行為を行っている。

天日槍⁽²⁵⁾が瀬戸内海の宇頭川にいたり、宿り処を乞うた所、海中に宿るようにした。天日槍は剣を以って、海中を攪きまわしたあと宿った。天日槍の仕業をみた現地の主は、これは土地を占める威脅行為とみなして、おそれた。剣をもって海水を攪きまわす行為を、挑戦的な荒々しい行為と解釈したのは、海水をかきまわす行為は、呪術的な意味があったものと、思われる。また天日槍は杖をもって、大地を刺したところから、寒泉が湧き出たといわれている。これは良く高僧や大師の話として伝わる。湧泉説話の一つである。霊水や薬水井の起源の話として、主人公の非凡な行為が、多くの人々に恵みをあたえる、説話の一類型である。人が生きるためには、水を必要とし殆どの良泉、霊泉、温泉などは、非凡な偉人が発見したり開拓した背景物語がつたわる。この様な行為をした人は、人々から尊敬され時には神として崇められる。天日槍も霊寒泉を湧させる奇蹟を行っている。すなわち呪術行為の主人公であった。

天日槍は神物を持参したが、要略すると、日本書紀では玉珠（羽太玉、足高玉、鵜鹿鹿赤石玉

または葉細珠、足高珠、鶺鴒鹿赤石珠)と、刀杵槍(出石小刀、出石刀子、膳狭浅太刀、出石杵、出石槍)鏡(日鏡)熊神籬になってあり、古事記では珠(珠=貫)比禮(振浪比禮、切浪比禮、振風比禮切風比禮)鏡(奥津鏡、邊津鏡)であった。これらを総合すると、玉(珠)と武器としての刀(槍)鏡と比禮になる。すなわち、珠、刀、鏡、比禮になる。これらを神物とも神宝とも、いわれているからには、大事なものとして、神聖視したことがわかる。

玉珠は宝石としての価値もあるが、その中から人間の誕生をみることもあるので、唯の宝石ではなく、生命力があり呪術性に豊んだ神秘性が包容されてあった。鳥や生物の卵は丸くて生命力があったので、玉は類似呪術として聯想したであろう。したがって玉珠は単なる宝石をこえて生成の神物として、意識された。

刀や杵、槍は身を守ってくれる武器であった。猛獣や敵から身を守り、積極的に攻撃用武器として活用された。しかし出石小刀の場合使用者の意志に反して、刀自体が自由に行動して、神出奇没する奇蹟があったのは、刀には呪術性が宿ってあったことになる。この様な奇蹟があってこそ、神物であり神力とされたのである。刀の意志による自在な行動に感動して、刀をみだりに使用しないで、神宝として大事にされ、たまには神体として祀られることもあった。

玉、鏡、刀でおもい出されるのは、神道で宝物とされている三種の神器である。三種の神器は皇位の徴証で、最高の神宝である。八尺鏡⁽²⁶⁾は天照大神が、天孫瓊々杵尊を葦原中国の君主と定めて、天降する時にあたえた物で伊勢神宮に奉斎され、その模造の神鏡は、宮中資所に奉安してある。八尺瓊曲玉は多くの曲玉を、一つの長い緒に貫き連ねたもので、天日槍が持参した珠二貫のようなものである。草薙の剣は素戔鳴尊が出雲国簸川の上流で、八岐大蛇を退治した時に、蛇の尾から出た剣で、日本武尊が東夷征伐の時にもちいて、熱田神宮に祀られている。天日槍の神物である玉珠、鏡、刀剣と、三種神器である曲玉、鏡剣とは、意識からつながるものであった。

天日槍の比禮は注目にあたいする神物である。比禮は振浪比禮切浪比禮、振風比禮切風比禮があって、比禮こもって浪を起こしたり、鎮めたり、風を起こしたり静める時にも効めがあった。また蛇や蜂があらわれた時にも、追い拂う効果があった。比禮は天災としての風波を鎮める呪力と、蛇や蜂のような害虫をはらう時にも、有効に用いられた呪物であった。害虫をはらう現実的な、実用であるのみならず、人の力ではどうにもならない波や風をも静め神秘性に豊んだ呪力があった。

天日槍は神物を所有し、駆使できる人物であった。すなわち権力者であり呪具神宝を所有する、司祭者であった。古代においては、権力者すなわち王と司祭者は、同じ意味をもっていた。神につかえる者が、人を司どることを兼ねた。⁽²⁷⁾新羅第二代王南解王の名は次次雄であるが、次次雄は尊長の称であったし、方言では巫者であった。巫は鬼神を祭り尊長として、尊敬されたし王であった。すなわち巫者が国王になり、国を治め人を司る統治者として、国民から尊敬されたことを意味する。天日槍は紀記では王子とされているが、新羅の記録にはないので、新羅の中央の王子ではなく、邊方の王子か族長として、神物を持って神事をも司る巫者であったが、神物をもって海を渡った司祭であった。当時高い文物で栄えた新羅から渡った天日槍は、司祭者としての機

能があったし、持参した神物は神宝として、大事にして神器として祭られ、神道の微証とされるようになった。したがって、天日槍の身分は、新羅の地方の王子か族長の子にして、巫者であったと言える。

六. 結言

天日槍に対する諸記録は、記述する過程において、説話的に潤色されたり、口伝したものを、後世になって文字化したため、その事実性については批判の余地もあるが、文献記録であるので、古代人の宇宙観や心意の記録として否定することは出来ない。

天日槍の七種とも八種といわれる神宝は、呪力を伴う巫具であったし、巫覡をもった天日槍の身分は、司祭者であった。玉、鏡刀は日本の代表的な神器として、神社の神体または神霊の象徴物として、祭られてあり、韓国では今なお巫具として、巫覡たちによって、神祭につかわれている。

古代においては、司祭者の身分は高く、祭儀と政治を担当したし、死後には神として崇拝され、社神として祀られる例が多い。天日槍の業績と、その周辺で起こった事象には、呪術性が濃厚であった。日光感妊して赤玉を生み、石玉から美女が生まれる奇蹟や、天日槍が剣で海水をかきまわしたり、杖を大地に刺した所から、寒泉が湧出る奇蹟もあった。阿羅斯等は赤織絹を郡府に蔵して、神聖性視したし、延鳥郎の場合には、王妃が織った織細絹を捧げて祭天して、日月精を再現される奇蹟があったのは、みな呪術的神儀であった。比禮をもって、蛇蜂、蜈蚣などの害蟲を追ったり、風も波も鎮めたのは、巫者の呪術神儀であった。

天日槍の記録からみて、すでに古代から、韓国と日本のあいだには、従来があった事がわかる。延鳥郎と細鳥女は岩に負われて、海を渡ったし、天日槍は妻のあとを追って、渡海した。海を渡るためには、航海するので、それだけに危険があったし、それで、風や波を鎮める呪具として、比礼を準備したであろう。

航海路は筑紫の姫島を通して、九州に上陸して、国東半島、瀬戸内海の揖土、淡路から、難波あたりに上陸して、近江若狹をへて但馬に至った。このコースは倭人伝の記録や、徳川時代になって往来した、通信使たちの航路ともほぼ一致する。

もう一つの路順は、出雲あたりに上陸して南下して淡路に至り、難波、近江をへて、但馬に至ったことも考えられる。

天日槍と阿羅斯等は、その行績からして、同一人物であったし、延鳥郎細鳥女が日本に渡った動機には、類似点が多いので、同一人物であった可能性も、否定されない。

古代における司祭者の渡来と、巫具の伝播は、日本の神儀に影響をあたえたであろうし、その真相を立証し理解するにあたって、重要な資料である。

天日槍の諸記録と、関連する説話を対比すると、次の様である。

註

- (1) (垂仁) 三年 BC. 27 春三月 新羅王子天日槍来的焉，将来物 羽太玉一箇 足高玉一箇 鵜鹿鹿赤石玉一箇 出石小刀一口，出石杵一枝 日鏡一面 熊神籬一具 并七物 則藏于但馬国 常為神物也 (一云 初天日槍 乘艇泊于播磨国 在於宍粟色 時天皇遣三輪君祖大友主 興倭直祖長尾市於播磨 而問天日槍曰 汝也誰人 且何国人也 天日槍对曰 僕新羅国主之子也 然聞日本国有聖皇 則以己国授弟知古而化皈之 仍貢獻物 葉細珠，足高玉，鵜鹿鹿赤石珠，出石刀子，出石槍，日鏡，熊神籬，膽狹浅大刀，并八物) (日本書紀卷第六)
- (2) 詔群卿曰 朕聞 新羅王子天日槍 初来之時 将来宝物 今宵但馬 之為国人見貴 則為神宝也 朕欲見其宝物 即日遣使者 詔天日槍之曾孫清彦令献 於是 清彦被勅 乃自捧神宝而献之 羽太玉一箇足高球一箇，鵜鹿鹿赤石玉一箇，日鏡一面，熊神籬一具，唯有小刀一，名曰出石 則清彦忽以為非献刀子 仍匿袍中而自佩之 天皇未知匿小刀之情 欲窮清彦而召之賜酒於御所 時刀子從袍子中出而顯之 天皇見之 親問清彦曰 爾袍中刀子者何刀子也 爰清彦知不得匿刀子 而呈言 所献神宝之類也 則天皇謂清彦曰 其神宝之豈得離類乎 乃出而献焉皆藏於神府 然後 開宝府而視之 小刀自失 則使問清彦曰 爾所献刀子忽失矣若至汝所乎 清彦答曰 昨夕 刀子自然至於臣家 乃明旦失焉 天皇則惶之 且便勿覓 (日本書紀 卷第六)
- (3) 又昔有新羅国主之子 名謂天之日矛 是人參渡来也 所以參渡来者 新羅国有一沼 名謂阿具奴摩 此沼之邊 一賤女晝寢 於是日耀如虹指其陰上 亦有一賤夫思異其狀 恒伺其女人之行 故是女人 自其晝寢時妊身 生赤玉 爾其所伺賤夫乞取其玉 恒裹著腰 此人營田於山谷之間故 耕人等之飲食負一牛 而入山谷之中，偶逢其国主之子天日矛 爾問其人曰 何飲食負牛 入山谷汝必殺食是牛 即捕其人 將入獄囚 其人答曰 吾非殺牛 唯送田人之食耳 然猫不赦爾 解其腰玉 幣其国主之子 故赦其賊夫 将来其玉 置於床邊 即他美麗孃子 仍婚為嫡妻 爾其孃子 常設種種之珍味 恒食其夫 故其国主之子心奢冒妻 其女人 言風吾者，非應為汝妻之女 將行吾祖之国即 竊乘小船 逃遁渡来留于難破 (中略) 天日矛持渡来物者 玉津宝云而 珠二貫 又振浪比禮，切浪比礼 振風比礼切 風比礼又奥津鏡 邊津鏡 并八種也 此者 伊豆志之八前大神也 (古事記 中卷)
- (4) 揖保里 所以称粒者 此里依於粒山 故因山為名，粒丘 所以號粒丘者 天日槍命從韓國渡来 到於宇頭川底 而乞宿處於葦原志舉乎命曰 汝為国主 欲得吾所宿之處 志舉即許海中 爾時客神以劍攪海水而宿之，主神即畏客神之盛行，而先欲占国 巡上到於粒丘而喰之 於此自口落粒 故號粒丘 某丘小石比能以粒 又以杖刺地 即從杖處寒泉湧出 遂通南北，北寒南溫 神山 此山在石神 故號神山，(播磨風土記)
- (5) 註 3 參照
- (6) 河伯之女 名柳花……金蛙異之 幽閉於室中 為日光所照 引身避之 日影又遂而照之 因而有孕 生卵 大五升許 王棄之與犬猪 皆不食 又棄之路 牛馬避之 棄之野 取鳥

- 覆之 王欲剖之 而不能破 乃還其母 母似物裏之 置之暖處 有一兒破殼而出 骨表英奇 年甫七歲 岐嶷異常 自作弓矢 百發百中 國俗謂善射者為朱蒙 故以名焉 (三国遺事 卷一, 高句麗)
- (7) 任東權, 江陵端午祭 (韓國民族學論攷 P. 211)
- (8) 異氣如電光垂地 有一白馬跪拜之狀 尋檢之 有一紫卵 馬見人長嘶上天 剖其卵得童男 形儀端美 驚異之 浴於東泉身生光彩 鳥獸率舞 天地振動 日月清明 因名赫居世王 (三国遺事 卷一 新羅始祖 赫居世王)
- (9) 婢積女國王女為妃 久無子胤 禱祀求息七年後產一大卵……解櫃脫卵而生 故因名脫解 (三国遺事 卷一 第四脫解王)
- (10) 故其天之日矛持渡來物者 玉津宝云而珠二貫 又振浪比禮, 切浪比禮, 振風比禮, 切風比禮, 又與津鏡 邊津鏡, 并八種也 此者伊豆志之八前大神也 (古事記卷中)
- (11) 謂王曰 上皇命我伝賜玉常 王親奉跪拜然後其使上天 風郊廟大祀省服之 後高爵王將謀伐羅 乃曰 新羅有三宝不可祀, 何謂也 皇離寺丈六尊像一, 其寺九層塔二, 眞平王天賜玉帶三也 乃止其謀 (三国遺事 卷一 天賜玉常)
- (12) 任東權, 韓國民俗上によつて見た色彩観 (韓國民俗學論攷 P. 85)
- (13) 註 4 参照
- (14) 註 2 参照
- (15) 炤知麻立于九年二月 置神宮於奈乙。奈乙始祖初生之處也 (三国史記 卷三, 炤知麻立于)
- (16) 以蛇比禮, 授其夫云 其蛇將咋 以此比禮三營打揆 故如教者 蛇自靜故 平寢出之, 亦來日夜者 入吳公與蜂室且授吳公蜂之比禮 教如先 故平出之 (古事記 卷上)
- (17) 第三十一神文王……駕幸利見台 望其山遣使審之 山勢如龜頭 上有一竿竹 晝為二夜合一……竹合為一 天地振動 風雨晦暗七日……以其竹作笛 藏於月城天尊庫 吹此笛則兵退痛愈 旱雨雨晴 風定波平 号萬波息笛 稱為国宝 (三国遺事卷二萬波息笛)
- (18) 孝昭王……天授四年…三月十一日 先君得神笛 伝于朕躬 年與玄琴藏在內庫…時有瑞雲覆天尊庫 王又震耀使檢之 庫內失琴笛二宝……即二親就庫栗寺大悲像前, 煙所栢夕 勿香卓上得琴笛二宝……日官奏曰 不封爵於琴笛之瑞 於是册号神笛為萬萬波波息 彗乃滅後多靈異 (三国遺事 卷三 栢栗寺)
- (19) 伝祖宗萬波息笛 乃於於王 王得之 故厚荷天恩 其德遠輝 貞元二年丙寅十月十一日 日本王文慶 (按日本帝記 第五十五主 文德王疑是也 余無文慶 或本之是王太子) 舉兵欲伐新羅 聞新羅有萬波息笛退兵 以金五十兩遣使請其笛 王謂使曰 朕聞上世眞平王代有之耳 今不知所在……藏其笛於內黃殿 (三国遺事 卷二 元聖大王)
- (20) 註 3 参照
- (21) 阿羅斯等以所給赤絹 藏于己国郡府……都奴我阿羅斯等 有国之時 黄牛負田器將往田舍 黄牛忽失 則尋迹覓之 跡留一郡家中 時有一老夫曰 汝所求牛者 入於郡家中 然郡公

等曰，由牛所負者而推之 必設殺食 若其主覓至 則以物償耳 即殺食也 若問牛直欲得何物 莫望財物 便欲得郡内祭神云爾 俄而郡公等到至曰 牛直欲得何物 对如老父之教其所祭神 是白石也 乃以白石 授牛直因以将来置干寝中 其神石化美麗童女 於是 阿羅斯等大歛之欲合 然阿羅斯等志他处之間 童女忽矢也 阿羅斯等大驚之 問已皈曰 童女何处去矣 对曰 向東方 則尋追求 遂遠浮海以入日本国 所求童女者 詣于難波孝比賣語曾社神 且至豊国国前郡 復為比賣語曾社神 並二处見祭焉 (日本書紀 卷六)

(22) 新羅国有女神 遁去其夫来 暫住筑紫国岐伊乃此賣島 乃曰此島者猶不是遠 若居此島 男神尋来 (接津風土記，金沢庄三郎 日鮮同祖論 P. 43)

(23) 第八阿達羅王即位四年 (AD.157) (日本，成務24年) J西 東海浜有延鳥郎細鳥女 夫婦而居 一日延鳥皈海採藻 忽有一巖 (一云一魚) 負皈日本 国人見之曰，此非常人也 乃立為王 (按日本帝記前後無新羅人為王者 此乃邊巴小王而非眞王也) 細鳥恠夫不来 的尋之 見夫脫鞋 亦上其巖 巖亦負皈如前 其国人驚訝 奉獻於王 夫婦相會 立為貴妃 是時新羅日月無光 日者奏云 日月之精 降在我国 今去日本 故致斯恠 王遣使求二人 延鳥曰 我致此国 天使然也 今何皈乎 雖然朕之妃有所織細絹 以此祭天可矣 仍賜其絹 偉人来奏 依其言而祭之 然後日月如旧 藏其絹於御庫為国宝 名其庫為貴妃庫 祭天所名迎日縣，又都祈野 (三国遺事 卷一 延鳥郎細鳥女)

(24) 註 3 參照

(25) 註 4 參照

(26) 辞苑 新村出編 博文館刊

(27) 南解居西干 亦云次次雄 是尊長之称唯此王称之…呼貴人之称 或曰，次次雄 或作慈充 金大問云 次次雄文言謂巫也 世人以巫事鬼神尚祭祀 故畏敬之 遂称尊長者為慈充 (三国遺事 卷一，第二南解王)

对比表

| 区分 神名 | 身分 | 妊者 | 妊因 | 出產 | 人物 | 渡東方法 | 渡東因 | 持參物 | 呪行 | 異變 |
|----------|----|----|------|-------|-----|------|-----|----------------|----------------|---------------------|
| 天日槍 | 王子 | | | | | 舟 | 追妻 | 七物 神宝 八物 | 劍攪海水 湧泉，小刀失 | |
| 天日槍妃 | | 賤女 | 日虹感妊 | 赤玉 | 孃子 | 舟 | 忌夫 | | 種々珍味 | |
| 阿羅斯等 | 王? | | | 白石 | 童女 | 浮海 | 追女 | | 比賣語曾神 | |
| 延鳥郎 | 日精 | | | | | 岩負 | 忽時 | | | 日光無，織細絹祭天 |
| 細鳥女 | 月精 | | | | | 岩負 | 追夫 | | | 日光無，◇ |
| 朱蒙 | 王 | 柳花 | 照身感妊 | 卵 | 朱蒙 | | | | | 犬猪不食，牛馬避之，鳥獸覆之 |
| 昔脱解 | 王 | 王妃 | 禱祀 | 大卵 | 脱解 | | | | | 鵲集航上而鳴 |
| 赫居世 | 王 | | 光垂地 | 紫(南)卵 | 赫居世 | | | | | 白馬跪拜，身生光彩，天地振動，鳥獸率舞 |
| 泛日大師 | 高僧 | 村娘 | 日歛感妊 | | 泛日 | | | | | 猛獸不食，鳥獸覆之 |